

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

アジアのめざめ

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ア  
ジ  
ア  
の  
め  
ざ  
め  
  
ラ  
ス  
・  
ビ  
ハ  
リ  
・  
ボ  
ー  
ス  
  
相  
馬  
黒  
安  
光  
雄  
  
ラ  
ス  
・  
ビ  
ハ  
リ  
・  
ボ  
ー  
ス  
伝

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書  
肆  
心  
水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

アジアのめざめ  
目次

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

序 相馬安雄 二七

# I

## インドにおけるボースの革命運動

革命児の生い立ち 三一

青年革命家 三四

ボース出生前後の叛乱事件 五六

インド総督の暗殺未遂事件 五〇

ラホール叛乱の失敗 三三

日本へ 三六

## 日本亡命の初期——帰化まで

日本政府からの退去命令 三八

相馬愛蔵の一言 四三

外務省の妥協 四六

住居転々 四七

吾〇

相馬俊子との結婚

相馬  
安雄

一一一

三八

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

日本における悲境時代  
日本帰化と妻俊子の死

五一

五四

全アジア民族會議開催  
インド独立日について

五四

「亞細亞鄉」  
インド交友会

五六

講演、著述による運動

六四

悲境  
六七

## 太平洋戦争時代（上）

七一

支那事変の勃発  
七一

七四

支那事変の拡大  
七四

七五

支那事変とインド  
七七

七五

インド本国の動向  
七七

七八

タゴール翁の招請ならず  
七八

八〇

インド総督の白書  
八〇

八二

チャンドラ・ボース氏の逮捕  
八二

八三

チャンドラ・ボース氏のインド脱出  
八三

八四

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

日本軍部との提携 八八  
両ボースの絶叫 九四

南方工作の藤原機関 一〇八  
バンコック潜入後の藤原少佐 一〇三

インド国民軍の創設 一〇八  
シンガポール陥落 二二〇

大本營の対印工作是正 二二三  
プリタム・シン氏等の悲運 一五

東亜代表者会議の開催 二二七  
二二七

大本營の対印工作是正 二二三  
プリタム・シン氏等の悲運 一五

東亜代表者会議の開催 二二七  
二二七

## 太平洋戦争時代（下）

一一〇

インド独立連盟バンコック大会 一二〇

英国の対印交渉 二三三  
二三三

ワルダ決議とボンベイ会議 二三四

インド独立連盟の改革 三九  
三九

チャンドラ・ボース氏の日本潜行 一四三  
一四三

チャンドラ・ボース氏の総裁就任 一四六  
一四六

ビハリ・ボースの憂慮 一四八  
一四八

ボース病を得て帰還 五一  
五一

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

孫文の手紙とボースの遺言

臨終 一五六

## インド独立運動の終結

チャンドラ・ボース氏の最期 二六三

インド国民軍の栄光 二六六

インドの独立 二六七

## II

ラス・ビハリ・ボース

### 往時追憶

一九一二年のデリー陰謀事件 一七二

その日の私 一七四

インド革命運動の発生 一七五

同志の家宅捜索から發覚 一七七

警戒網をくぐつて郷里へ 一七八

隠れ家に待機 一八三

各地呼応して反乱をはかる 一八四

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

インド脱出の記

ラホール事件 一八七  
危く虎口を脱す 一九〇

一九二

ラホールよりカルカッタへ 二九一  
カルカッタよりシンガポールへ 二〇九

ペナンをさして 二三六  
ペナンの港 三六  
シンガポールより香港へ 三〇  
香港 二三七

III

相馬 黒光

義母となつて親しく見たラス・ビハリ・ボース

二五二

最初の親近感 二五三  
日本語独習 三四四  
琴と胡弓 二五七  
清き愛 二五九

SAMPLE  
Shoshi-i-Shinsui.com

あとがき	相馬黒光	一八三	あ	尾行者	二六一
				玉のような子	二六三
				食事の好み	二六四
				青年同胞の世話	二六六
				墓 参	二六七
				子等はみな可愛い	二六九
				正しい日課	二七二
				宗教に対して	二七三
				号「天來」	二七四
				敏捷と沈着	二七六
				足袋	二七七
				電車の中で	二七八
			——寂寥——	二八〇	
			子等への言葉	二八〇	

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 凡例

- 一、本書は、相馬黒光・相馬安雄著『アジアのめざめ——印度志士ビハリ・ボースと日本』（一九五三年、東西文明社刊）が収める文章のうち、相馬安雄、ラス・ビハリ・ボース、相馬黒光の著述になる部分を収めたものである。同書中の一章に「ボースの想い出」と題して十六名から寄せられた短文が集められているが、これは省いた。
- 一、本書では現代仮名遣いで表記した（原本も概ね現代仮名遣いで表記されている）。
- 一、本書では新字体の漢字で表記した（原本も概ね新字体で表記されている）。俗字的な表記を正格のものに変えたところがある（例、年齢の「才」を「歳」に）。
- 一、送り仮名は適宜加減して現代的感覚に即すようにした。
- 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。
- 一、読み仮名ルビを適宜附加した。
- 一、不統一な表記を統一したところがある（例、ロシヤ／ロシア、パンジャップ州／パンジャブ州、へきれき／霹靂、いっせい／一せい／一斉）。
- 一、読点と中黒点を適宜附加した（例、三三人→二、三人、亜細亜クラブ→アジア・クラブ、プリタムシン→プリタム・シン）。
- 一、当て字の類を仮名表記に変えたところがある（例、藻抜け）。

一、平仮名表記がかえつて読みにくく感じられるだろう場合、それを漢字表記に変えたところがある（例、ぶじ、じぶん、かくご、強じん）。

一、些細な訂正は特に断ることなく行なった（例、マダカスカル→マダガスカル、チヨン曲→チヨン曲）。

一、鉤括弧括りの会話文の前後にある改行を省いたところがある。

一、ママのルビ書き（原文のままの意）は丸括弧つきで記した。

一、鉤括弧は、会話・引用類を「」に、刊行物類を『』に、という基準で整理した。本書において新たに鉤括弧を加えることはしていない。

一、本書に掲載した写真は、原本が巻頭口絵写真として収めるものである。

一、現今漢字表記が避けられるものを平仮名表記に置き換えた（鉤括弧で括られた固有名詞中のものは除く）。置き換えたものは五十音順に次のとおり。亞細亞（アジア）、印度（インド）、此処（ここ）、之（これ）、屢々（しばしば）、其処（そこ）、泰（タイ）、忽ち（たちまち）、独逸（ドイツ）、独乙（ドイツ）、乍ら（ながら）、亦（また）、已む（やむ）

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAME  
Shosha i. com



ラス・ビハリ・ポース（昭和12年秋）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ア  
ジ  
ア  
の  
め  
ざ  
め

---

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

ラ  
ス  
・  
ビ  
ハ  
リ  
・  
ボ  
ー  
ス  
伝

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAN  
Shop.com



ボースと長男正秀、長女哲子（昭和17年）

## 序

革命児ラス・ビハリ・ボースがなくなつてから、まる八年になる。

彼は、不幸にして、宿望のインド独立をみずく死んだが、祖国インドは、いまりつぱに独立している。しかもその独立が、日本の犠牲においてであることは、現在のインド識者の、ひとしくみとめるところである。日本があえてこの犠牲をはらうにいたつたのは、一つの運命であり、一つのいきおいであつたが、仔細にこれを検討すれば、このいきおいのかげには、亡命志士ボースの、三十年にわたる不斷の努力が、少なからず、与つて力あるものと考えられる。

前世からの因縁とでもいうか、志士ボースと、私ども相馬の一家とは、きつてもきれぬ関係をもつことになつたが、ボースが私の義兄となるにおよんで、その関係は、いつそう緊密になった。したがつて、老齢の母、黒光が、自分の生きているあいだに、子孫のために、婿の一生を書きつづつておきたいと考えるのは、しごく当然のこととで、二、三年まえから、ボ

ツポツ材料をあつめていた。

ところが、昨年夏、ボースの同志タラクナート・ダス博士が、米国から母国インド訪問の途中日本にたちよられた際、内外人を網羅するユネスコ会員による歓迎会の席上、「インド・ビルマ・インドネシアの独立は、実に、日本の犠牲によつてもたらされたのだ」と、絶叫せられ、その後、「ボースの伝記はあるか、ないならば、だれかにすぐ書いてもらいたい、自分がインド語に翻訳して、インドの民衆に読ませたい」といわれたので、この伝記の上梓をいそぐこととなり、仕事は母の手から、私にゆだねられた。

私はこの書を、あくまで伝記であらしめるため、私の感情なり、観察なり、主觀なりを、一切混じえないで、ただ集つた材料を、ボースの生い立ちからインド独立まで、順序をおつて羅列することにした。そして巻末に、母の記述と、ボース自記の「往時の追憶」、「インド脱出記」さらに、生前、ボースが親しく御交誼をいただいていた方々から寄せられた「憶い出」の玉稿（本版ではこの章を省いた）を集録して、ボースのひととなり、性格を、この中から、汲みとつていただくようにした。

最後に、本書をまとめるにあたつてお手伝いくださった渋沢青花氏、小田仁二郎氏、欠損を承知で出版をひきうけられた、東西文明社の小嶺嘉太郎社長、さらに御多用にもかかわらず

SAMPLE  
Shishi-Shinsui.com

ず、「憶い出」をお寄せくださいましたみなさまに、心からの御礼を申しあげたい。

本書をもつて、地下にねむる義兄ボースにおくる、インド独立の報告書とする。

昭和二十八年一月

相馬 安雄  
識

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用的範囲でお願い致します

SAI  
Shop.com



ビルマ地方委員会の開会演説におけるボース  
(昭和17年9月22日、於ラングーン市公会堂)

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
I 相馬 安雄 [Shii-Shinsui.com](http://Shii-Shinsui.com)

## インドにおけるボースの革命運動

### 革命児の生い立ち

ラス・ビハリ・ボースの生い立ちに就いては、詳細のことは解らない。彼自身から聞いた断片的な話と、ヘマンタ・サルカル著『ベンゴールの革命家』と、遺児、防須哲子の手許に在る材料とによれば、大体つぎのようである。

彼は一八八六年（明治十九年）三月十五日、ベンゴール州ブルドワン郡のスバルダハと呼ばれる一小村に、父ビノド・ビハリ・ボース、母ブボネンショリ・ボースの長男として生まれた。彼の家は代々武士の階級（インド四階級の第二）に属し、彼の祖父カリチャラン・ボースは最後まで祖先伝来の地、スバルダハを離れることをしなかつた。彼の父は極く温厚な人物で、政府印刷局の書記に採用され、仏領チャンデルナゴール市のファターカ・ゴーラ町に一

家（現存）を構えたが、勤務の関係で、カルカッタ、シムラなどを転々とし、晩年その職を辞してからはチャンデルナゴールの家に住み、一九二二年、ここで他界した。一九二三年（大正十二年）七月一日ボースが日本に帰化したのには、父の死もその一因であった。

ラス・ビハリには一人の妹と腹違いの弟二人、妹一人、合せて四人の弟妹がある。長妹はスシラ・バラ・シルカル（Sushila Bara Sircar）で、既に十年前寡婦となり、現在ベナレス市に住んでいるが、ボースは自分が死ぬまで彼女に仕送りをしていた。異母弟はバンキム・ビハリ・ボース（Bankim Behari Bose）、bijon Behari・ビハリ・ボース（Bijon Behari Bose）と呼ばれ、前者はイギリスの学位を持つ電気技師で、後者と末妹については詳かでない。

ラス・ビハリは幼少の頃、フグリ地方のバドレスワールに近い、パララ・ビグハテ村にいる母方の叔父のもとで育てられたが、異母弟妹があるという、家庭的事情によるものではなかったかと想像される。その後チャンデルナゴールの父の家に在る時、ドゥブレ・カレッジ（Duplex College）に入学したが、第七学級に進んだとき、父と共にカルカッタに移り住み、父がシムラに転勤してからは叔父の家に移った。カルカッタで、彼は英人経営のモルトン・カレッジ（Morton Institution・註カルカッタ大学は本来試験機関であつて、各地に在るカレッジの卒業生は、ソニーで試験を受け合格した場合に始めてバチャエラー・オブ・アーツの学位を受ける。モルトン校

はこのカレッジと同一資格を有するのでカレッジと訳した。大学にはバチエラーの学位ある者ばかりの教育機関があり、これを卒業して試験に合格すればマスター・オブ・アーツの学位を受ける）に入つたが、数年ならずして退学して、正規の学業を抛擲し、一九〇四年以後は、専ら革命運動に没入した。

モルトン校時代、彼はア式蹴球の選手であったが、ひそかにピストルの練習もやっていたらしい。

### 青年革命家

ラス・ビハリが、自己の胸中に自由の雄叫びを意識し始めたのは、チャンデルナゴールの学校にいた十五歳の時であった。多くのインド革命家と同じように、彼の得たインスピレーションは、バムキム・チャンドラ・シャッテルジの不滅の文字『アナンダマス』に由来していた。更にナビン・チャンドラ・センの激情詩『プラッシーの戦』が、彼の胸の焰をかき立てた。そして、デビプロサンナ・ライ・チウドウリの『サラト・チャンドラ』の中に出で来るムチニ・インド土人兵の叛乱は、彼に非常な感銘を与え、ついに彼をして武力革命家たるべく運命づけてしまった。

彼は学業を棄てて、インド土人兵たるべく志願して、友人等を驚かした。然しながらウイリアム要塞の駐屯軍主計官から、ベンゴール人は土人兵に入隊することは出来ないという回答がきた。そこで彼はボンディシェリのフランス当局に志願したが、これまた空席がないと断られた。その後、彼はウイリアム要塞の書記となつたが、二週間でそこを飛び出し、次いで、軍隊付き書記官の地位を得たが、これにも満足出来ず、彼方、此方の土人軍に入隊しようとして志願を続けた。そしてとうとう待ち切れなくて、ジャイプールに向かう途中、遠縁の者につかまつて、父のもとへ連れ返された。父も彼の傾向をはつきり知つて、学校を退いて職業に就くことを奨め、かつ強制した。たまたま、義勇兵軍団の大尉に任命されたが、幸か不幸か、その辞令が父の手に入つたため握りつぶされてしまい、渋々ながら森林調査官に任官した。ところがその赴任地がグルカ兵輸送の中心地、カサウリ (Kasauli) であつたので、早速兵士等に働きかけ始めた。次いで、グルカ兵聯隊の所在地、デラドゥン (Dehradun) に転任したので、本格的にグルカ兵の間に革命思想を鼓吹し、ここを基地として、各地の軍隊にこの運動を拡大して行つた。

森林調査官という職務は、彼が自己の目的のために東奔西走し、デリーにおける総督爆殺の陰謀を自ら決行したにも拘らず、当局をして何等の疑いも抱かしめず、却つて善良、忠

実、勤勉な官吏として、賞讃を博し、その信用は警察高官が、革命党員の行動内偵を、彼に依頼する程であった。従つて、彼の努力は着々成功を収め、各地にインド軍隊の一斉蜂起の準備が出来上つていった。同志と共に彼が計画したこの挙兵計画は、不幸、内通者のあつたため、蹶起直前に失敗に歸して、彼はついに日本亡命のやむなきに至つた。

これが有名な一九一五年（大正四年）のラホール叛乱事件であるが、一九一二年のデリー陰謀事件と共に項を改めて詳述する。後に添付したボース自記「往時追憶」を読んで頂きたい。

ラス・ビハリが十五歳にして既に革命に志したことは、いかにも早熟であつたようと思われるが、これは家庭的な淋しさや不満が一因であつたかも知れない。然し、十五歳で投獄されているタラクナート・ダス博士の例に見るよう、少し骨つ筋のある、当時のインド学生ならば、誰もが選んだ道であつて、必ずしも珍しいことではない。イギリス政府がインド人に教育を与えない植民地政策を採用した所以も頷かれる。

インドの革命家には、ガンジーに指導される無抵抗主義派、ネール等の国民会議派、プロターグの主唱する世界連邦主義派、ラジパット・ライの流れを汲む武力革命派などがあるが、ラス・ビハリがなぜ武力派に走つたか、その動機、理由は解らない。しかし、日露戦争（一九〇四—五）前後に血氣旺んな学生であった革命家の多くは、武力派に属したものらしい。有

色人は白色人に劣る民族であるという観念を植え付けられていた当時のインド人にとって、極東の一小国、日本が、世界最大の国、ロシアに勝った、それも有色人種が武力で白色人種に勝ったという事実は、正に青天の霹靂であつた。そしてインドの若い革命家等に武力による自國の独立の希望と勇気を抱かせたに違いない。少なくともラス・ビハリにとっては、日露戦争は、武力革命実行に突入する動機であつた。

日本におけるラス・ビハリの友人、知己が等しく認めるように、彼は実に緻密な頭脳の持ち主で忍耐強く、用心深く、しかも大胆不敵であつた。正義感が強く、細心で正確無比、些細なことも忽せにしなかつたが、決して冷たい人間ではなく、温かい大きな抱擁力を持つていた。日本におけるインド人同志の中に一人のスペイを発見して、志士の間に大問題となつたことがあつたが、このスペイが自分等の眞の同志の一人になるようでなければ自分等の目的は達せられるものではないといつて、このスペイの出入を許していた。

このようなラス・ビハリの性格であつたから、ラホール叛乱事件の準備を完成するまでに十年余の歳月を費やし、この間に英国人、ドイツ人、或いは、中国人などから、秘密に、武器、弾薬、爆弾を入れ、インド国内は勿論、海外からも多数の同志が彼の許に馳せ参じていた。彼はまた非常な雄弁家で、何人をも説破せずんばやまず、舌端火を吐くの觀があつ

た。明治の中期、島田三郎等と共に、その雄弁を謳われた木下尚江氏は、彼の日本語の演説を聴いて、煽動演説の最たるものだと評していたが、この熱弁を以て、インド軍隊を打つて一丸として、ラホール叛乱事件にまで引きずつていったものと思う。

彼の性格と熱弁とは、日本においても、各地に各種、各階級の日本人の支持と、後援と、同情とを得た。そして第二次世界大戦には日本軍部のインド作戦まで贏かち得たのであった。彼、ラス・ビハリ・ボースこそ、生まれながらの革命児であり、徹頭徹尾、終始一貫した、軍を利用せんとする武力革命の実行家であつたといい得る。

### ボース出生前後の叛乱事件

反英叛乱事件の最初は一八五七年である。当時はまだ東インド会社がインドに君臨していた。その搾取は悪辣極まるもので、インド民衆は永年の怨みを心底にひめていた。爆発はいつ起るかわからない状態であった。爆発は思わずところからおきた。

インド傭兵の銃器を手入れする油が、牛と豚の脂肪で製造したものだという噂がひろまつた。インドの風習として、インド教では牛を神聖視し、牝牛はインドの母、牡牛はシヴァ神の権化としていた。また回教徒にとって、豚はコーランにより殺すことを戒められてい

た。この神聖な動物の脂肪を使用しているときいて、民衆の憤激が極度に達した。

一八五七年五月三日、オード第七臨時編成部隊が、反英運動の火蓋を切った。これはすぐに鎮圧されたが、続いて五月十日、ミーラットでインド傭兵が叛乱をおこした。この叛乱はインド北部一帯から中央部にまで拡大した。ミーラットの蜂起部隊は、デリーのバハデュー・シャをインド国王とした。戦闘は数カ月にわたつた。しかし軍事力の差は明らかであった。英國の援軍が到着すると、インド軍の敗北は眼にみえてきた。九月、デリーが陥落し、シャ王はとらわれ、王子は銃殺された。

この事件を契機として、インドの統治が、東インド会社から英國政府の手に移つた。英國政府は表面合理的な統治をよそおいながら、さらに悪辣な搾取を続けていた。

一八八五年、英國政府は、インド国民の政治参与の名目で、「インド国民會議」を組織した。会議員の七十二名が、全部親英派とあつては、インドの国民運動には、なんら得るところがなかつた。一九〇五年（明治三十八年）、東亜民族の一小国日本が、世界の強国ロシアと戦つて勝利を得た。これがインド国民に激烈な衝撃を与えたのである。改めて日本を認識し、日本を尊敬し、有色人種も決して白人種に劣るものではないとの自覚を得るようになつた。

時の総督カーヴィン卿が、高压統治の手段として、有識者の多いベンガール州を二つに分割しようとした。州民の猛烈な反対と共に、ラジパット・ライの革命運動がおきた。運動は五年六年七年と三年継続したが、ついにラジパット・ライは捕えられ、弾圧され、またも革命運動はやぶれた。

当時のインド国民会議は、過激派、穏和派ともに、インドの独立或いは自治を目標にしながら、いずれも合法的政治活動で目的を達しようとしていた。しかし民間の革命家のうちに、武力によらなければ、老猾な英國の手から脱するのは不可能だと自覚を持つ者がいた。ラス・ビハリ・ボースも実際にその一人であった。

ボースはグルカ兵を煽動していた。その一方パンジャブの青年たちに革命思想を宣伝した。インド教徒ディノ・ナット、アバート・ビハリ、バルモカンド等は、ボースの手足になり、過激な宣伝文を、学生のあいだに配布して歩いた。

### インド総督の暗殺未遂事件

デリーが、それまでのカルカッタにかわって、インドの新首府に定められたのは、一九一九年であった。十二月二十五日、インド総督ハーディング卿がデリーに入ることになった。

ボースは革命運動実践の第一歩として、総督暗殺を計画した。青年を一人ともにつれ、ボースは市民の群にまぎれ、総督の行列を待ちかまえていた。やがて華やかな行列がくりひろげられ、総督の象の輿があらわれた。ボースはその輿をめがけて爆弾を投げつけた。爆音と閃光、ボースは総督と二、三人の従者の倒れるのをみとめた。英官憲の狼狽と群衆の動乱のなかを、ボースはたくみにくぐりぬけ、デラドンに帰った。

しかしボースの爆弾は従者一人を斃したのみで、ハーディング卿の生命をうばうことには出来なかつた。犯人捜索の網がきびしく張りめぐらされたが、ボースの身辺にはまだ危険がせまつてこなかつた。

一九一四年一月、ボースはパンジャブ州ラホールにおもむいた。そこには同志のバルラード・ディノ・ナット等がいた。ボースは同志等とともに運動を開始した。一月になると、ディノ・ナットが家宅捜索を受け、ついに捕えられた。危険がせまつてきたらしい。ボースは直ちに部下をつれてラホールをのがれ、翌朝デリーに姿を現わした。捜索の網は次第にたぐられていた。同志アボッド・ビハリの逮捕を知つた。ボースは数カ月前アボッド・ビハリの家に立ちよつた際、鞄をあずけてあつた。それが、押収されたので、善良、忠実な官吏ボース自身がデリー事件の首魁であることが、ばれてしまつた。危険を感じたボースはデ

リーを逃れ、チャンドルナゴールに潜入した。ここにはボースの家があり、官憲の眼が包围しているのは分かっていたが、フランス領に属しているので、英國官憲がボースを逮捕するについては、フランス側と一応の交渉をしなければならない。その手続のために、一日の安全はあると思われた。

チャンドルナゴールの家で、ボースは新聞をみた。革命党陰謀の首領として、ラス・ビハリ・ボースの写真が掲載されていた。ボースが帰ったというので、同志が集ってきた。ボースは会合を開き、今後の運動の打ち合わせをした。しかしその夜のうちに隠れ家を変えていた。翌日警官隊の捜索が始まつたが、捜索隊は何ものも発見することが出来なかつた。

ボースは次々と同志の家に居を変えていったが、官憲の捜索はいよいよ厳重になつた。今までボースの首にかけていた七千五百ルピーの賞金を一万二千ルピーに増額した。同志のうちには、国外への亡命をすすめるものがあつたが、ボースは頑としてこの勧告をしりぞけた。

—— 外国に亡命したなら、革命運動はどうなるのだ。革命のために命は投げだしている。この事業を棄てて命を助かるとは思わぬ。捕えられるまでも国内にふみ止まり、運動を継続しよう ——

### ラホール叛乱の失敗

嚴重な捜査網も、さすがに中だるみになつてゆるんで來たので、ボースはベナレスに出た。ベナレスはサチンドラナット・サニヤルの地盤であった。ボースはしばしば会合を開き、運動の方針をねつた。

一九一四年（大正三年）八月、歐洲大戦が勃発し、世界に動乱の渦をまき起した。インドの革命もこの機をとらえなければならない。米国から革命党員がぞくぞくと帰国した。彼等の言によれば、ドイツが必ずインドの革命を援助するというのである。ボースの決意もかたまつた。首領たちの会合が持たれた。

米国から帰国したヴィシュヌ・ガネシュ・ピングレイ、カルカッタから馳せつけたサチンドラナット等八名が集つた。ピングレイによれば、米国から帰国したもの四千名、さらに行動を起せば二万名が、直ちにかけつけるという。サチンドラもカルカッタの状勢をとき、会合は、即時決行の一路に進んだ。ドイツの援助の有無にかかわらず、今日をおいて、蹶起の機はないのである。

しかし最大の問題は武器、弾薬を如何にして手に入れるかであった。大量の武器、弾薬が入用なのに、思うように入手できなかつた。その間、ボースは爆弾を検査している時、突然

の爆発で左手と足に大怪我をするという事件もあって、蹶起の日が延び延びになつた。

一九一五年一月、決行の活動を起すことになつた。中心地をラホールと定め、ボースはサンドラ、ピングレイを従えて乗りこんでいった。アラハバットの指導者は小学校長のダマドール・スワラップ、さらにリブハッチとプリヤナットの二人はベナレスの軍隊を煽動し、ナリリというベンゴール人はジュバルポーの軍隊を受け持つた。

蹶起の日は一九一五年二月二十一日夜半十二時と決定された。ラホールに革命が起きたら、各地一斉に呼応、兵をあげる手筈になつていた。青年に革命思想をふきこみ、絶えず軍隊に呼びかけていたボースにとって、一生の目的、インド独立のための軍隊の叛乱が、ここに実現することになった。決行の日を通告された各地の同志、軍隊は、ラホール革命の報を待ちうけていた。

ラホールには革命党的秘密本部が四ヵ所あつた。ボースは同志ラム・サラン・ダースの家を本部にしていた。決行五日前、サラン・ダースが、一つの情報をつかんできた。それは英國が突如インド兵の武装を解除し、その上、英國軍隊の動員を始めたというのである。スペイが潜入していたか、裏切者がいたに違ひなかつた。

急拠幹部を召集、会議の結果、決行の日をくり上げて十九日と変更した。しかしこの変更

も手おくれであつた。十九日朝、秘密本部の一ヵ所が、警官隊にふみこまれ、つづいて他の二ヵ所も、その日のうちに包囲され、多数の同志が逮捕されてしまった。

今となつては、頼みとするのが、フェローズ・ポール聯隊の蜂起だけとなつた。これはラホール附近の聯隊で、この蜂起こそ革命の口火であつた。聯隊は決行時刻三時間前、九時に暴動を起した。事のあるのを探知した英國軍隊は、時をうつさず応戦し、先導インド兵五十名は、英國の機関銃のまえに、無残な最後をとげた。

ボースは秘密本部を出て他に移つた。警官隊がふみこんだ時には、もぬけのからで、押収されたのが地図一枚であつた。

かくてラホール叛乱事件は、雄図むなしく潰えさつた。

もはや一刻もラホールに止まつていられない情勢であつた。ボースは部下一人をつれ、ペナレスに逃れた。しかしボースの身辺はいよいよ急をつげてきた。ボースの国外亡命の意図が決意されたのは、この頃である。その目的は武器の入手であつた。再起をはかるには武器が必要である。それには日本に渡り、上海で武器を買い集めるのが近道にちがいなかつた。ボースはカルカッタに向かつた。

その頃、詩聖タゴール翁が、渡日するといふ噂がたつていた。これこそボースにとつて利

用すべき好機であった。ボースはピー・エヌ・タゴールと変名、タゴール翁の親戚と称して、乗船券を手に入れた。船は日本郵船の讃岐丸だった。出帆の日には、同志サチンドラナット等が見送りにきた。出帆まぎわ、ボースは、二挺のピストルを出して、サチンドラナットに手渡した。ピストルの名手であつたボースにとって、これを手ばなすのは感慨無量であつたろう。船客としては無用有害な武器であるが、党としては一挺のピストルでも有用であつた。やがて出帆のドラがひびき渡つた。

ボースは甲板に立ち、故国インドに別れをつげた。これが永遠の訣別にならうとは、ボース自身さえ考え浮かべることができなかつた。

ラホール叛乱は失敗に帰し、ボースは国外に亡命、ピングレイは三月二十三日ミーラットで捕えられ、叛乱事件の首謀者として死刑、ひとりサチンドラナットが、ボース亡命後も革命運動に活躍していた。やがてこれも捕えられ、無期徒刑の宣告をうけた。

## 日本へ

讃岐丸は五月十二日にカルカッタを出帆、二十二日にシンガポール、二十九日には香港に到着した。香港を経由するインド人は、改めてここで、香港警視総監から旅行免状の下附を

受けなければならなかつた。ここまで来てつまずいたら、総ての計画も水の泡である。

ボースは警視庁に出頭してみた。日曜日なので、英国人の警視とインド人の書記がいるきりで今日は駄目だという。ボースは二人に懇願した。日本に渡ろうとする貧書生が、べんべんと次の船を待つことができない。特別の計らいで旅行免状を下附してくれと頼みこんだ。インド人の書記が同情し、ようやく免状を作製してくれた。警視がこれに署名した。ボースは難を逃れることが出来た。

翌朝讃岐丸は香港をはなれ、六月五日神戸に入港した。七日に神戸を出発、途中京都を見物し、八日の夜に新橋についた。その夜は近所の安宿に泊つた。

ボースの日本亡命は、単なる亡命ではなく、その目的は、上海に渡つて武器を入手し、これをインド本国の同志に送附すること、またインド革命の援助をドイツに懇請することであつた。間もなくボースは上海に向かつたが、上海における武器入手の計画は失敗し、ふたたび日本にまいもどってきた。

この日から、三十年にわたる、ボースの日本亡命生活が始まるのである。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 日本亡命の初期——帰化まで

### 日本政府からの退去命令

上海から日本に戻ったボースは、麻布こうがい町に家を借りた。中国革命軍の首領孫文氏の日本亡命を新聞で知ったのは、その頃である。孫文氏もまた、在米の中国革命党からボース渡日の報を受けていた。革命家として、亡命者として、同じ境遇の二人であつた。ボースは孫文氏を麻布靈南坂近くの仮寓に訪ねた。

二人は英語で話し合つた。談数刻、ボースは百年の知己の思いを、胸に抱いた。肝胆相照し胸襟を開いて、革命を談じ、東亜の将来を論じた。後に、ボースを頭山満翁に結びつける端緒をつくつたのが、孫文氏であつた。

そのうち先輩の同志フジバット・ライ氏も渡米の途次日本にやつて来、在日インド人にも

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
II ラス・ビハリ・ボース  
[Shinsui.com](http://Shinsui.com)

## 往時追憶

この稿は、ボースが日本で往時を追憶して書いたもので、彼の旧著から転載した。

### 一九一二年のデリー陰謀事件

一九一二年十二月二十五日のことである。インドの新首府デリーの市街は、今日しも正式に入都せんとする、インド総督ハーディング卿を迎うるための市民の群れを以て、混雑をきわめていた。街を南北に貫く大通りの両側は市民の垣を作り、その前には多数の警官が、警戒ぶり物々しく立ちならんでいた。

やがて行列の一行は肅々と街路をねつて来た。先頭に立つたのは、案内の役人たちを乗せた象、次が警固の騎兵隊を乗せた象、三番目が総督とその従者たちを乗せた象であつた。この行列が、ちょうど総督府に至る中程まで来た時のことである。突然異様な音がして、総督

SAMPLE  
ShishiShinsui.com

の乗った象の背中の辺にあたり、ぱつとばかりに閃光があがつた。その瞬間、総督および二、三の従者がたおれた。

あまりの突発事件に、市民は何事のおこつたのかを知らず、しばらくは啞然としているばかりであった。しかし警官は急に騒ぎだした。右往左往に走つた。総督を助けおろす者と、犯人を捕えんとする者と、観衆も漸くその事件の内容をさとつて、一時にくずれだした。警官の罵り騒ぐ声がひときわするどくひびいた。

捜索網が直ちに全市に渡つてはられたことはいうまでもない。そして警官たちは血眼になつて犯人を捕えんとした。しかし犯人は天にむかつて逃げ去つたか、それとも地に潜つて逃れたか、ついに捕えることができなかつた。そればかりか、いかにして爆弾がハーディング卿を傷つけたか（卿は重傷をおい、従者数名は即死したのであつた）そのよつて起るところを突きとめることすらできなかつた。ある者は観衆の中から爆弾を投げたのだといい、ある者は総督の椅子の下に爆弾がしかけてあつたのだといい、今日に至るまでなお、その犯行の何<sup>考</sup>人によつていかにして行われたか明らかでないのである。しかし革命の徒によつて企図されたことである点だけは、疑う余地なく、政府はその後一ヵ年有余にわたつて厳重な捜索をつづけた。

## その日の私

さて爆弾事件のおこったちようどその時のことであつた。なだれをうつて四方に崩れゆく群衆の中にまじつて、一人の青年をつれた大柄の男があつた。総督の遭難場所から少し離れたところまで来ると、青年を顧みながら、「おちついておれ。あわててはいけないぞ」と注意したが、ふと青年の膝のあたりに異臭を発する粉末をみつけると、おもむろに懷中からナイフを取りだし、青年の着物の端を切りすてて、またもや悠々と停車場の方へむかって歩を移した。

街にはゆく人々に警官が眼を光らせていた。青年は胡散な男のそばに寄りそつて、「先生、大丈夫でしょうか？ あんなに厳重な見張りをしていますが」とささやいた。

「大丈夫だ。きょろきょろわきを見ないで、平気な顔をしてついておいで、おどおどするとかえつていけない」

例の男はこうたしなめておいて、懷中から巻烟草をだすと、それを一本口にくわえ、大胆にも群衆と警官で混雑している停車場の中へ、しかもわざと警官の鼻先を通つて入つていつた。そして列車に乗りこみ、どこともなく去つていつた。

この胡散な男こそ、私が今から顧みるその日の私自身なのであつた。思えば今昔の感無量

SAMPLE  
Shoshi-Shinsyu.com

なるものあり、おこがましいようではあるが、インド民族運動の重点にも触れるのであるから、この際くわしく述べたいと思う。

### インド革命運動の発生

まずインドの革命運動の発生と、私自身の経験について一言することを許されたい。

そもそもインドの革命運動はいつごろに端を発したかというと、一九〇五年にインドのカーヴィン卿がベンゴール (Bengal) 州を二分する計を立てた時にある。由来ベンゴール州はインド国民の知識が一般に発達し、従つて国民運動に奔走する者が多かつたところから、カーヴィン卿は同州を二分することによつて交通不便ならしめ、彼等の運動の勢いを矯めようとしたのである。ベンゴール州民のこれに反対したことはいうまでもないが、カーヴィン卿はその反対をおしきつてまでも断行した。そこで州民の反抗は益々猛烈になり、その反対運動は、やがてベンゴール一州のみに止まらず、全インドにまで拡大し、その目的もまた、インドの独立という方面へ転向していった。

ここに於て政府の弾圧とインド国民の反抗が漸増的に激成され、その結果、インド国民は政府のこの弾圧政策に対しても、武力に訴えるよりほかに策がないということを知り、秘密

結社を作つて兵器弾薬をあつめ、全国的革命をおこす計画をたてた。

この運動に携わった者の大部分は、知識階級の青年学生等で、政府の弾圧が激しくなればなるにつれてその数をまし、また直接行動を統出せしめたが、一九〇五年から一九一五年にわたる十カ年間に、官吏の襲撃暗殺された数はすこぶる多く、またそのために死刑あるいは終身懲役に処せられた青年も多数にのぼつた。

私のごときもじつにこれら青年の一人で、ちょうど十五歳の時分にはすでに革命的な志を抱いていた。一八五七年のインド軍隊反乱に関する小説物語等は、非常に私の心を刺戟し、インドの革命を実現させるためには、インドの軍隊と連絡をとり、この力を借りねばならぬとの確信を抱くにいたり、学業を放擲して軍籍に身を投ずることをくわだてたこと再三であつた。しかしその都度失敗に帰し、最後に森林局の書記にやとわれたのであるが、幸運にも、四、五年にして営林所長の位置にまで昇進することができた。

インド革命運動はこの間に著しい進展をなしたので、表には忠実な英國官吏を装いながら、裏には暇あるごとに全インドを歩きまわつて、ひそかに運動をつづけたものであつた。ハーディング卿の爆弾事件も、じつにこの間におこつたのである。

一九一三年のはじめ、負傷せるハーディング卿は、私の任地であるデラドゥン (Dehradun)

に来たつて静養をした。私は卿のために一夕歓迎の宴を催し、一場の演説をなしたが、最後に卿のために敬意を表することを提議して、満場の賛成を得た。これに対しても卿の感謝したことはいうまでもないが、一人の高等警視のごときは、いくどとなく私の許を訪れて、何彼と革命家搜索に関する内容をうちあけ、書類をしめし、万一の場合の援助を依頼したりなどしたものである。

### 同志の家宅搜索から発覚

越えて一九一四年の二月、デリーにいる同志の一人である中学校教師の、アボッド・ビハリ (Abod Behari) が突如として家宅搜索をうけた。そしてその押収品のうちにあつたのが、私の鞄である。私は前の年の夏に九ヶ月の休暇をとり、全インドにわたつて革命運動の旅をなしつつあつたが、その途次デリーなるアボッド・ビハリの家に立ち寄つて鞄を託して去り、その当時はラホール市の大学校長の息バルラージを訪れて、その附近に下宿していたのである。

英國官憲はアボッド・ビハリの家宅搜索によつて私の鞄を発見し、はじめて私が革命運動に深い関係をもつものであることを知り、愕然としたのであるが、運悪くも家宅搜索の矢先

きにラホールの同志ディノ・ナット (Dina Nath) よりの書信がアボッド・ビハリの許にとどいた。もちろんアボッド・ビハリの手にいる前に、官憲によつて開封され、私がラホール市にいることが判明したのである。

ある朝ディノ・ナットが私を訪れ、正午ごろまでいて帰つたが、まもなく同志の一人があわただしく駆けこんてきて、ディノ・ナットの家が捜索をうけていることをつげ、身辺を注意してくれといつて立ち去つた。しかしさの方ふたたび注進にきた時には、すでにディノ・ナットは五時ごろ逮捕されたということであつた。

そこでもはや一刻も猶予はできない。私はターバンを頭に巻いて北方インド人を装い、(ターバンはラホールその他北インド人のつける風で、ベンガール州の人はつけない) 一人の部下をつれてこつそり下宿を出ると、馬車をやとつてラホールの停車場に走つたが、実に間髪をいれず、五分のうちに警官の一隊は下宿を襲つたということである。私は同志数名に送られながら、六時半の汽車でラホールを去つていった。

### 警戒網をくぐつて郷里へ

翌朝九時ごろ汽車がデリーにつくと、私はここ的情形をさぐらんとして下車し、ターバン

姿で大通りを闊歩し、警視庁の前まできた。もちろん私はアボッド・ビハリ検挙のことは知らなかつたのである。みると、門の前に十五、六歳の少年がたたずんでいたが、遠くから私の姿をみとめると、急いでそばへやってきて、「おじさん。お帰りなさい。けれど用心してください。みんなつかまつてしまつたのですよ」という。そこで私は少年を横町へ誘い入れ、「そうか、伯父さんもつかまつたのか?」とたずねた。伯父さんはアボッド・ビハリのことと、彼をはじめ中学校長のアミール・チャンドなどみな逮捕されたということである。

「わしの鞄も押収されたかな」

「そうです。だから、うっかりすると、おじさんあぶないですよ」

「よしよし、でお前はこんなところで何をしていたのだ?」

「伯父さんに差し入れ物にきていたのです」

「そうか、では伯父さんに面会できたらな、わしは大丈夫だとつげてくれ。わしのことは心配しないでもいいぞ」

私は、はじめてすべての真相をきき、おのれの身の英官憲につけねらわれていることを知つた。しかし私はなおも、市中をあちこちと見て歩いて停車場にきて、カルカッタまでの切符を買った。

列車が私の郷里であるチャンデルナゴール (Chandernagore) についたのは、翌朝の四時ごろであった。そのころはすでに、私のことが肖像いりで新聞にあらわれ、あるいはヒマラヤに逃げたとか、あるいはアフガニスタンに逃げたとか、またある新聞には、外国に逃亡したとか、種々の臆説が書き立てられてあつた。

私はそこで下車した。みると構内のベンチに二人の警官が網をはって待ちうけていたが、早朝のこととて氣をゆるして眠りこけていた。その前を静かに通りすぎて改札口にくると、見知りごしの駅夫は私の顔を見て、ちょっと笑つただけで通してくれた。私は駅から数町のわが家へと急いだ。

家につくと、それを知った同志たちが心配してかけつけてきた。

「まあまあ寝かしてくれ。おれは汽車中よく寝なかつたのだ」

私は、朝飯をすますと、床に入つて一眠りした。

目をさましたところへやつてきたのは、デラドゥンで懇意になつた高等警視の弟であつた。面会をもとめられてあつてみると、「今デリーの兄のもとから電報がまひつて、何かあなたが革命家の首領であるという疑いをうけているそうで、非常に心配しております。これから私といっしょにカルカッタの警察にいって、弁解をなすってはいかがですか?」と、あ

くまでも私を忠実な英國官吏と信用しての言葉である。そこで私はおちつき払って、皮肉な笑いを顔に浮かべながらいった。

「それはどうも御親切にありがとう。しかし兄さんにつたえてください。御期待にそむいて相すまないが、私はりっぱな革命党員です。デラドゥンでは、兄さんにいろいろと機密をうちあけていただいて、非常に便宜を得ました。お礼を申しますとおっしゃってください」

意外の言葉——何という意外の言葉だろう！ 兄は全くこの革命家に翻弄されていたのだとわかると、警視の弟は真赤になつて帰つていった。

その後でも私は全くおちつきはらつて、逃げようともしなかつた。なぜなれば、この町は仏領に属しているから（インド国内で仏領はこのほかにも四カ所ある）、仏官憲に交渉なしで、やたらに英國の警官が逮捕することはできない。警視の弟から兄に電報をうち、英國のインド総督から仏国の官憲に交渉があつて、はじめて手を下すとして、それらの照会の時間をみつもつてみると、優に一日は安全だからだ。

私はその日一日大手を振つて町を歩き、同志の革命青年たちとともに、何回となく会合をひらいて協議した。

さてその夜は、部下の父親が行政長官をしているのを幸い、そこに泊ることにして、夕方

こつそりと家をぬけてそこにひそんだ。そこは私の家よりわずか半町ほどしかへだてていなかつたので、翌朝早く、仏国及び英國の警官が、私の家を包囲して搜索しているのが、その家の窓から手にとるごとく見られた。警官の一隊は正午ごろまでかかって、近所を虱つぶしに搜索していたが、ついに何物も発見することができないで引きあげていった。その後へもつていつて私はゆっくりと我が家へ帰つたものである。

「それはあまりに危険でしよう」と心配する部下たちに対し、「検査ずみの家ほど安全な隠れ場所はない」と一言残して、帰つていった。はたしてそれから四、五日は無事で、いよいよここも危険と感じて五日目に居を移すと、翌日二度目の搜索があつて、危いところをのがれたのであった。

### 隠れ家に待機

次の隠れ場所は同志の兄の妾宅をえらんだ。ここに面白いことは、同志の兄というのは、素行のおさまらない道楽者であったが、弟が面に熱誠をあらわしてたのむと、「よし、おれも同じインド人だ。同胞が英國人に苦しめられているのを、見殺しにはできない。命を的にかくまつてやろう」と、いつにない真摯な顔つきで誓つた。そしてその日から彼は生まれか

SAMPLE  
Shashi-Shinsui.com

わったような人間になり、一滴の酒も飲まなければ、内外の連絡のためのほかは、決してその家に足踏みもしなかった。しかも女もまた女丈夫で、何くれとなく私のために世話してくれた。そしてこれは後の話であるが、その後男は女に暇をやり、女はこれを転機として尼になり、清い生涯に入ったということである。男といい女といい、何というふしきな変わりようをしたものであろう。私はその時賞金七千五百ルピー（約九万円——昭和十二年当時の金高）のお尋ね者であった。ふつうならその賞金ほしさにでも密告しそうなところである。それがこの豹変である。彼等の中に久しく眠っていた愛国心がめざめたのである。

それはさておき、私は一人の部下とともに、遊廓の真中にあるこの妾宅に、十日の間ひそんでいた。賞金をかけて血眼になつて捜索している英國官憲も、よもやこんなところにひそんでいようとは想像だにしなかった。

しかしそのうちに、そこも長くいては危険と考えたので、また他に一軒家を借りてそこに移つた。そして一日党員の会合をひらいて協議した。その結果一同の意見は、もはや国内にいては危険であるゆえ、外国に逃れた方がよいということに一致した。しかし私はまだ首をたてには振らず、「まあ、もう少し考えてみよう」ということで解散した。

翌日ふたたび会を開いたが、いよいよ外国ゆきを勧める者が多く、中には日本ゆきの切符

を買ってきてまで、決心を促す者があった。その時、私はしばらく沈思していたが、やがて静かに口を開いていった。

「僕はいろいろ考えた。その結果、ここに取るべき手段が二つ残されている。その一つは、どうせ捕えられるなら、他の者の手にかかるよりも、諸君の手によつて突き出してもらいたいということだ。僕のからだには、一万二千ルピーという莫大な賞金がかけられてある（数日の間に増額されたのである）。資金の不足しているわれわれにとつては、じつに貴重な金だ。その金によつてわれわれの運動を有効に導いてくれ。さもなければ僕は、外国へ逃れる気は微塵もない。捕えられるまでも国内に踏み留まつて、なお運動をつづけたいのだ。外国へゆけとの好意は謝するが、それは僕の本意でないのだ」

「ういいながら私は、外国ゆきの切符をびりびりに裂いてしまつた。室内は急にしづまりかえつて、無言の感激が一同を捉えた。

### 各地呼応して反乱をはかる

そのうち官憲の搜索の手も少しゆるんだので、ある夜私は、船に乗つてガンジス河を溯り、あけがた、ノボッディップに上陸し、汽車によつてベナレス（Benares）に至り、その地

SAMPLE  
Shishi-Smash.com

の同志と会つて、あらかじめ借りさせておいた家に住んで、その夏をすごした。

折しも四月ごろから歐洲大戦がおこり、世界をあげて動乱の渦にまきこまれんとしつつあつたところ、米国にある革命党員が続々帰国し来たり、しきりとドイツがインド革命を援助するということをつたえた。そこで全インドの革命支部に急遽檄をとばして、蜂起を促し、ある夜ガンジス河に船を浮かべて、同志の会議を開いた。集まる者は、ドイツの報をもたらしてアメリカより帰つたピングレー（Vighnu Ganesh Pingley）、カルカッタより馳せつけたシャティンドラナット・ムカルジ（Sachindranath），後ロシアにゆき帰印後投獄され、先年漸く釈放されたローイ等すべてで八名、いずれも首領株であった。これらの志士たちが集まつて相談したことは、革命反乱の決行に関する問題で、結局ドイツの援助あるなしにかかわらず、今日をおいて革命の好機会はないから蹶起しよう。今、北インドに革命をおこせば、英國はこれを押えることはできないのであつた。

そこで四方に人を派して、いよいよ反旗を翻す準備にかかつたが、何より必要なのは兵器弾薬で、あらゆる方法をもつてこれが蒐集を図つた。これより少し以前、カルカッタのローダ商会という英人の經營にかかる武器弾薬の輸入商が、本国より五十挺の拳銃を輸入して、インド人の書記がそれをうけとりに税関へゆくことになつた。この書記こそ革命党の廻し者

で、税関で品物をうけとると、そのまま党の本部へ運びこみ、直ちに党員の間に配付を終つたことなどがあるので、一同これに力を得て意氣軒昂であつた。

ところがある夜のこと、私は爆弾を吟味中、突然爆発して、同志とともに負傷をした。私はただちに自動車に乗つて知人の医者をたずね、手当をうけてそこに二ヵ月間寝てくらした。

思いがけない椿事のために蹶起の日がのびのびになつた。それでよいよ活動の中心をラホール (Lahore) に移すことにして、ある者にはベナレスの軍隊を扇動する任務をさしつけ、またある者には、中央州のジャバルプール (Jabalpur) で同じ行動をとるよう命令を残して、ある夜私はラホールゆきの列車に乗りこんでベナレスを去つた。

ベナレスからラホールに至るには、途中デリーにおいて一度汽車を乗り換えなければならぬ。ちょうど真夜中のことである。私はあたりに気を配りつつ、漸く汽車を乗り換えて、ほつと一息つく間もなく、ふと前をみると、そこに腰をかけているのは、デラドゥンの任地で見知りごしの警視であつた。さすがに私もはつとして、思わず身のすぐむ心地がしたが、更に心をしづめてよく見ると、天の祐けか、警視は身をはすにしてよりかかつたまま眠つていた。私は従えた青年を顧みながら、「別の車に乗り換えるぞ」と一語ささやいたまま、つ

SAMPLE  
Shinsui.com

と立ち上がると、列車の中をつぎからつぎと車室をぬけ、最後の室におさまって漸く危難をのがれた。

### ラホール事件

ラホールについてからの私の責任は大きかつた。ラホールから北部インドをつらねてベンゴールに至るまで連絡をとり、いよいよラホールに革命が起つた暁には、各地一斉に呼応して兵を挙げることを約した。そこで各地の同志、軍隊等はひたすらラホールの蜂起を待つた。

機はいよいよ熟した。一九一五年の二月二十一日——この日夜半こそ、蜂起の日と定められた。

ところが四、五日前に至り、党員の中に間諜があつて、逐一英國の官憲に報告されたらしいことがわかつた。なぜかといふに、英國の官憲が急にインド軍の武装を解除し、ラホール附近における英國軍隊の動員を行ひだしたからである。それでもはや二十一日を待つことができず、急に日を繰りあげて、十九日事をあげることに決し、とりあえず、附近の連隊にあるインド軍にこれを通じた。

当時ラホールにおける革命党の秘密本部は四ヵ所にわかれていた。そのうちの一つは、私の同志の一人ラム・サラン・ダースの家にあつたが、折からダースの妻は妊娠九ヵ月の身重であったので、よもやかかる所に革命党の本部があろうとは、誰も想像しなかつた。この家では常に二階に干物を出しておいて、これを異常のないという目印とした。もし干物が出てなければ、変事があるから入ってくるなという知らせで、このことは幹部だけが承知していた。他の三ヵ所の本部も、壁に紙を貼りだして無事の合図にするというふうで、それぞれしめしあわせておいた。

ところが十九日の朝に至りて、突如として本部の一軒が、警官の手によつて包囲された。そこで党員は屋内から拳銃を発射し、警官隊また発砲して、しばらくは静かな朝の街に、時ならぬ激戦をはじめていたが、ついに弾丸つきの党員は、あるいは傷つき、あるいは斃れて、警官隊の捕うるところとなつた。

残るは三軒の本部である。自重して様子を窺つているうちに、夕方停車場から汽車をおいてきた二人の革命党員があつた。待ちうけていた警官に誰何されると、不覚にもいきなり拳銃を出してこれを射殺した。これがために、二人はただちに他の警官隊によつて捕縛されたが、その懷中から出たのが、一軒の秘密本部の住所である。それによつて、その本部もまた

警官隊によつて包囲され、党員の幾人かは捕えられた。

こうなつてはもはや、手も足も出なくなつた。今はラホールの近くにあるフェロスボール連隊の蜂起をたのみに、それを待つばかりであつた。しかしこれまた、約束の時刻である夜の十二時に先立つこと三時間にして暴動をおこしたが、かねてこの事あると知つて備えていた英國軍隊の機関銃の的となつて、あわれ五十名のインド兵は無残の死を遂げた。

この他、各地の軍隊も陰謀発覚したといふ報告がつぎつぎ入つてくるので、私は断腸の思いであつた。

二十日の朝になると革命党の出資者の一人である某老人が、私を訪ねてきて、「もはや挙兵の機は逸しました。これを以てすぐに立ちのき、再挙をおはかりなさい」といつて、英金貨二枚（二百ポンド）を入れた袋を渡してくれたので、取りあえずラム・サラン・ダース夫妻を帰国させ、私自身は、あらかじめ他に借りておいた家の三階にひとまず移つた。それが正午ごろのこと、二時ごろにはすでに警察の手が廻つて空家をおそつたが、見出されたのは地図一枚のみで、武器弾薬はもちろんのこと、用意しておいた独立宣言書、各地の革命軍に対する訓令、軍旗等重要な品物は一つ残さず持ち去つてあつた。

かくしてインド革命史上に名高いラホールの反乱は、ついに雄団むなしく画餅に帰したの

である。

### 危く虎口を脱す

三階の隠れ家に移ると、ただちに会合をひらいて協議したが、前後の事情は、もはや一刻もラホールにあることをゆるさないので、ひとまずベナレスに退去することにして、部下一人を連れて停車場に来た。炳々たる警官の眼をたくみに逃れて、汽車に乗り込んだまではよかつたが、ガジアバーで乗り換えようとすると、一人の紳士がホームのベンチに腰をかけている。見ると、デラドゥンの知事の官房主事をしている男である。汽車を乗り換えるには、いやでも前を通らねばならぬ。その前を通ればすぐとみつけられることは知れきっている。

「万事休した。もうどうでもなれ」

私は覚悟をきめた。そして部下にむかい、

「あそこにデラドゥンの知事の官房主事がおる。おれは捕えられるかも知れない。お前は別に離れておれ」といつて、懷中から煙草を出し、それをくゆらしながら（これが危機に際する時の私の常套手段だ）強いて平静を装い、官房主事の前を静かに歩いていった。官房主事はちらりと私の顔をみたが、すぐと面をむけて、その通るのを見逃してくれた。安宅の閑の弁

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE  
III 相馬 黒光 [Shi-Shinsui.com](http://Shi-Shinsui.com)

義母となつて親しく見たラス・ビハリ・ボース

ラス・ビハリ・ボースと私共相馬一族の縁ほど不思議なものはありません。祖国独立運動のため日本に亡命して來ていた一インド人——当時は二人——を保護するという、その発端の気持には、微塵も私的なものではなく、ただ相馬の侠氣、人道上の公憤から、期せずして事件の中に兩人一致して引き入れられたにすぎないのですが、人間同志の接近も一様には行かない中を、こうして親子も及ばぬほどの結果を生じたところに、ボースの人間が大きく浮かび上がつて來ます。

さて、それをどういう風に語つたものか、一家のようになつて暮らした年月が長いだけに、丁度いつも見馴れた佳い景色のようなもので、何處をどうと取り上げて云うわけには行かないのですが、或る時々に絵のよう残つて見ると致しますと、

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

### 最初の親近感

私どもがボースをかくまつたと云つても、かくまわれる当人に取つて、それは決して快適な場所でもなければ、何の慰めがあるでもない、古ぼけた粗末な部屋に、この部屋だけの手洗いがついている、無論部屋は棟をへだてており、家族の生活とも、まして賑やかな店の方など、何処か遠方のことのようで、聽こうとしても届かないし、一足出て行つて隙見しようにも、それは許されない隠れ人の身でした。時間には定つた女中が食事を運んで来るが、これは言葉が通じない。とすると、かくまわれているというものの、事実は幽閉されたのと何の変わりもないのです。とうとう一人の同国人は逃げ出しました。

私共は、二人のインド人が一人になつていることを女中の報告で聞いて驚いたが、それで部屋へ行つて見ると、一人残つたボースには何の異状もない。不自由と不安と憂鬱と、逃げた片割れが経験し、遂に氣も狂いそうになつて飛び出してしまつたところに、同じものを経験しながらこの人は別に焦躁をあらわしていない。逃げた一方の行きさきを心配しているが、それで自身が動搖はしない、その後もおちついて『日英会話独習』を前に、日本語の独り勉強をしていました。このあたりが先ず私共にとつて、何の説明も要らない親近感の第一歩で

した。丁度日本の古武士が、義のために激しく闘いながら、一身の安危という点では、或る諦念の上に自若としている、そういうところに何か共通する態度でした。

たしか、そのときであつたと思ひます。四十七士の話をして、統領としての大石良雄の沈着と忍耐力とを、日本人は誰も激賞して、子供でもよく知っていますと暗にはげましてやりました。

### 日本語独習

その時分は私も、少しは英語を話せる下地を持つていました。いまのように雑多な学課を平均して修めるのと違つて、自然その学校の特色とするところに学課の重点がおかれていたから横浜のフェリス女学校を出て、その後東京で明治女学校に学ぶと、稚なげながらいくらか話せるようになつてるので、それが、計らずもその時役に立つて、英語のお客様を引き受けることが出来たわけですが、当時はいまのような閑人でもなく、店の方に気を配ることが多い上に、家内に変わった客があるような風に見られてはならない、まず一日に一度見廻つて様子を知る位のところで精いっぱいでしたから、ボースの日本語勉強の相手になつて上げるという落ち着いた時もありません。それでボースは何処までも独り勉強で、ただ疑問

につき当たるとそれをこの時に質問する。私はその質問に会うたびに、この人の心構えが非常に行きとどいたものであること、所謂、志士などと聞いて感ずる或る粗大さとは全く正反対なものであることを、はつきり認めさせられました。その質問は、一例をあげると、『（行く）』という言葉は日本で階級によってどう使い分けるかというようなことで、私はこれを、インドが極めて階級的な、身分の区別のやかましい国であるための習慣からとばかりは受け取らないで、文化的な素養の正しさから出る好ましい心用意と感じさせられ、快いことに思いました。

ここで孫文氏を引き合に出すのは気の毒ですが、孫文氏が日本に亡命して、初めて犬養翁のお宅を訪問した時のこと、犬養翁には他で度々会っていたが、夫人に会うのは初めてでした。そして孫文氏は日本語も少し話せるつもりでいたので、夫人に対して「おかみさん」と呼んで大失敗をし、その後は恐ろしくなって日本語が話せなくなつた、と、これは孫文氏がボースに会つた最初に話されたというから、それがためボースは一層正確な日本語を研究したのではないかと思われます。

ボースの日本語が驚くべく早く上達したのには、最初からこの心がけが大いに効を奏していますが、今度この伝をまとめに就いて、いまはただ一人のわすれがたみの哲子に、遺品

を持つて来させて見ると、その中から当時の小学教科書が、巻の一から巻の十二まで、それが町寧に使用された、なつかしいような古さをもつて出て来たのには胸を打たれました。巻中一々の単語に、赤インキで、読み方と訳語がきれいに書き込んである。これは俊子にもきかないことでしたが、あの堂々の偉容の蔭のこの謙虚な勉強ぶり、見ていると故人の誠実が眼に迫って来て、私には何とも老眼のめがねの曇り拭いあえない思いです。

ボースがあらためた来賓の前で初めて日本語で挨拶したのは、頭山翁と石井外相との間に話し合いが出来て、政府が内々の保護を約束し、一応安全を保証された機会に、新竜土町の隠れ家へ、頭山翁関係のお世話になつた方々のおいでを願つた時でした。しかもその日本語が適切で、又流暢であつたのには、皆さん非常に意外で、いつの間にこう達者になつたと、私共にしてもたしかに一つの驚きでした。更に当日心ばかりのおもてなしを、自身のインド式手料理で食卓に就いていたことなども、ボースの風格の一面を示すものだと思ひます。

更に一段と明るみに出で、世間に名声のきこえると共に諸方へ講演に招ばれて、殆ど席温まる間もないという有様でしたが、これも日本語に自信を得たればこそ、どんな地方にも躊躇なく出かけられたもので、新宿中村屋裏庭の幽居時代からのあの熱心な勉強も、インド独



中村屋から麻布新竜町に移った記念（大正5年4月）。前列右より、犬養毅、ボース、寺尾亭。後列右より、杉本順造、中村弼、葛生能久、内田良平、水野梅曉、宮崎滔天、佃信夫、大川周明、池田医。

SAMPLE  
Shochi-Shinsui.com

立運動の精神のたくましさと共に、周到な用意のほど、ひそかに敬服させられました。

### 琴と胡弓

ボースが日本に来て、いつとなく耳にとめた音楽は琴の音でした。その時分は、まだ西洋音楽の普及もいまのようではなく、従つて静かな住宅地の生垣の奥や二階座敷などから、よく琴の音が洩れていました。祖国を遠く去つて流離の中のボースの胸に、何処でその音が忍び入つたか知りませんが、或る時私が何か無聊を慰めたいと思って、何をして上げたものかと尋ねると、あの琴を聴いて見たいという。成程と思って、すぐにも希望を容れてやりたいところでしたが、琴曲家は沢山あっても、まだ英國大使館の眼をのがれているボースのことで、その辺を心